

歴史小説に新風を吹きこむ 永井路子 『この世をば』

今月の28日は何の日かご存じですか？ヒントを差し上げましょう。「ススキ、お団子、お月見...」。もうお分かりですね。十五夜・中秋の名月です。

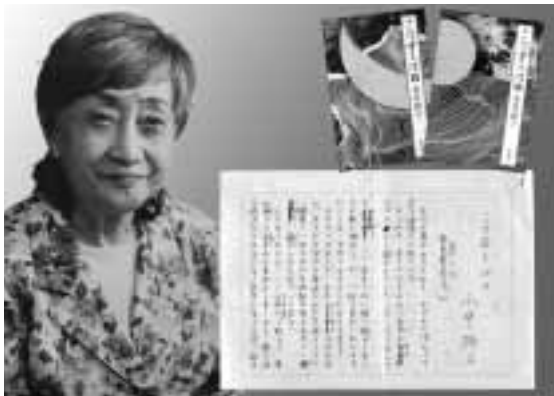
十五夜は、中秋つまり旧暦の8月15日に行われるのが一般的ですが、太陽暦においては中秋は毎年変化しています。現行暦では中秋は早い年で9月上旬、遅い年では10月までずれ込むこともあります。また、十五夜の月、中秋の名月は必ずしも満月とは限らないそうですが、旧暦においてはだいたい満月になることが多かったようです。

ところで、「この世の中は自分の世の中だ、ちょうど満月の欠けることのないように」という意味の歌を詠んだ人物をご存じですか？ちょっと傲慢ですよ。

今月は、その人物を新たなイメージで描き、「難解な史料をもとに歴史小説に新風を吹きこんだ」と高く評価された作品を紹介します。永井路子著『この世をば』です。

主人公は「御堂関白」と呼ばれ、平安朝の摂関政治の頂点をきわめた藤原道長。従来、道長に対しては、栄華を誇った傲岸不遜な人物といったイメージが持たれてきました。実際に、3人の娘が

次々と天皇の^{きさき}后となり男児を出産、みずからは天皇の外祖父として、左大臣、摂政、太政大臣と権力の階段を駆け上りました。そして後一条天皇に入内した^{じゆたい}威子が中宮に立后、^{うごごう}太皇太后となった一条天皇妃・^{けん}彰子、皇太后となった三条天皇妃・^{けん}妍子とあわせ、三宮を独占したときに詠んだ歌が、
この世をば わが世とぞ思ふ 望月の
かけたることも なしと思へば



永井路子氏と『この世をば』の肉筆原稿・単行本

なのです。この歌から想像する道長は辣腕の政治家で、まさに権力の権化のように思われても仕方ありません。

しかしながら、永井路子は従来の道長像とは違った、平凡で人間味あふれる、幸運な男を描きだしました。そして、その幸運の影には、姉・詮子、妻・倫子、娘・彰子をはじめとする女性たちの力が大きかったことを指摘しています。

『この世をば』は、「大鏡」「栄華物語」「御堂関白記」「^{しょうりゃく}小右記」などの史料を丹念に読み込み、通説に対して新たな解釈を与えたとともに、歴史における女性の立場を見直しているという点で、永井路子ならではの作品といえます。

十五夜の満月を愛でながら、あらたな藤原道長像と、彼を取り巻く平安王朝絵巻を楽しんでみてはいかがでしょうか。